

◎七転八起。

◎長い物には巻かれる。

◎悔い先に立たず。

◎念には念を入れよ。

◎糠に釘

◎二兎追う者一兎も得ず。

◎叩けば埃が出る。

◎喉元過ぎれば熱さ(味)を忘れる。

◎人の欠点を見て自分の欠点を直せ。

◎馬子にも衣裳。

◎猿も木から落ちる。

◎シミチ(為道)とキジ腹強い内。

◎農家は博打ちだ。

困難に会っても絶望しないで奮起すること。又、良いことが起きる。

権力のある人には反抗せず従った方が良い。

後悔は先に立たず、転ばぬ先の杖。

注意の上には注意して事に当たれ。

いくら打っても反応が無い。

あっちを追ったりこっちを追うとどちらも得られない。

どんな人でも詮索すると粗が出る。

生活が苦しかった時にはお世話になったが生活が楽になると次第にその時の忘れる。

自分の欠点は何とも思わず気づかないが、人の欠点を見て我が欠点を直す。

乞食でもだれでも立派な衣裳を着せると立派に見える。

その道に専門の人でも失敗する事がある。

昔の農家は肉類を絶対に家に入れず、又、肉類は絶対に食べなかったが、空腹になり、飢えに苦しむと肉であれ何であれ、何でも食べべ為道どころで無かった。

腹の強い内は誰れでもキジ(腹一杯でわがままなこと)だが、金や資産が無くなり空腹になると、わがままが無くなり温顔になる。

農家は雪の消えるのを待つて春先から田圃に全力を投資するが、秋には「豊作」か「皆無作」か一寸先が見えないのに全力を投資する。

◎棚からぼた餅。

◎酒は百薬の長。

◎鴨が葱を背負ってくる。

◎風邪は万病のもと。

◎栄枯盛衰。

◎女三人集まると姦しい。

◎大きな大根程辛くない。

◎男寡に蛆が湧く。

◎豊年は飢餓の基と思え。

◎百姓百倍

◎百姓の才能。

◎百姓の来年

◎朋友は六親にかなう。

思いがけない幸運、苦勞しないで幸運が舞い込んだ。

度を越さないと薬である酒は適量に。

良いことが重なって向こうからやって来る。

風邪位と軽く万病のもとである。

先祖代々から伝わって来た家柄にも盛んなときと衰えるときがある。人間は何時も同じで無い。

女は一般にお喋りで、昔から井戸端会議であった。読んで字の如し。

身体の大い人ほど、気持ちが誠意がある。

一人暮らしてであると、身の回りが不潔である。

豊年の後は凶作がくると思え、農家への注意。

百姓は播いた種が百倍になると言うが朝星を拝み汗水流して働いて夜星を拝み家へ帰ってくるが、大昔から乞食同様の生活であった。

百姓はなんでも、たいていの事は自分でやってしまうから百姓万能だと思ふ。

百姓は作物を多く作れば作るほどに値下がりして損をする。

両親、兄弟、姉妹の六親につながると思うが、百の親類より一人の親友と思ふ。

大晦日の出来事

金持ちが一晩で

貧乏になった話

昔、大地主といえば、家や屋敷が広く、蔵も二つや三つあって、田畑も何町歩もあって、自分の家の人だけでは耕作できないので、「借子」という若い人達を十人も十五人も頼み、自分の家に住み込ませ、お金があり余る程もうけたものでした。村人たちは、「オオヤケ」といったものです。

その村で、何一つ不自由なく暮らしていた「オオヤケ」の夫婦があつたよ。

そこの住み込み女中の間に「オフサ」というよく働く女が居た。「オフサ」は子どもの頃からこの家に奉公に来て、朝は星のあるうちに起き、夜はみんな寝静まる迄働く感心な女でした。ある年の大晦日の夜のことでした。その村では、昔の苦勞を忘れないため、年越の晩だけは、米のご飯を食うのをやめて、麦飯を食う習慣であつたから「オフサ」は習慣通りに麦飯に「タクアン漬」を出して主人夫婦をまつていました。

主人がお膳に向かうが早いか「オフサなんだこれ」、夫婦二人

とも贅沢になって、昔の苦勞も忘れて、「イガイガ」する麦飯なんか食いたぐねえ、これはお前たちのような使用人が食うものだね」と、言葉より早く足でお膳をけとばしてしまいました。

妻（カガア）もまた拾う訳でもなく足でけとばして、「オフサ、フラッテ、ナンド食わながア」と言った。

「オフサ」が言いました、「旦那さま、オガさま聞いて下さい、一年に一回麦の神様に感謝の気持ちで私が作ったのよ、ごめんさい」と謝りました。

先祖から伝わってきた一年に一度の偲ぶ麦飯でした。

しかし、主人怒って「オフサ、お前何時からこの主人に文句を言うようになった。」と、お膳を蹴飛ばし、傍にあるものを手当たりしだいに「オフサ」にぶつけて「よくきけ、生意気な奴だ、お前は今夜限りクビだ、見たぐないから、さっさと出て行け」

「オフサ」は長い間奉公したけれども、裸同然、何一つ買ってくれません。腰巻き一枚もくれない、わからず屋でした。

夜の事でしたので「オフサ」は暗闇の中どこにも行く事ができませんので、馬小屋に行き、馬の神様に訳を話して一晩泊めて貰うことにしました。

「馬の神様、長い間よぐ私と一緒に働いてくれて有り難う、私は、ちょっと聞けばよかったのに、私の不注意で、旦那様夫婦に追い出され、お前たちともわかれなければなりません。わかれるのは残念だけれども仕方ありません、実家に帰ります。

皆さんも身体に気をつけて、元気で暮らして下さい」

「オフサ」は枯れ草を上げて藁の上にゴロ寝しました。

その時、馬の神様が、お前もこんな「乞食」のような人にかわれたくないだろう朝になったら私の背中に乗りなさい」と言われ夜明けを待ちました。

その夜更けに、人の話し声がするので聞いていたら「食べ物と足でけつたりなげたり、ぶつつけるひどい夫婦だば、人間の「クズ」だ「麦の神様出て行くのなら、わしらもここにはおれん、みんな出て行くべし」「おらも居たぐねであア」。

米の神様、水の神様、味噌醤油の神様、最後にお金の神様も大きい袋を背負って「オフサ」お前にも、これをやるから遠慮するな」みんな家の神様は大きな袋を背負って出て行き誰も後を振り返りませんでした。

「オフサ」も決心した以上馬の神様の世話になって、大きなお金の袋を背負って出て行きました。

門を一步出ると家の中に居た便所の神様も「おらも行く」と、家の中の全部の神様が出て行きました。「おらもここの旦那にはうんざりした、さあ行くべし」おらも一緒につれでつと、柱に貧乏の神様だけが力なく小さい袋を持って立っていたよ。「わごとも連れて行ってけろや」と言う間に屋敷は空っぽになり、雪の上に夫婦二人座って泣いてあつたよ。

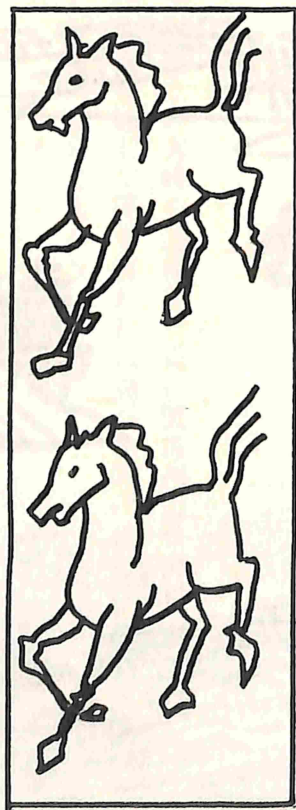
金持ちが貧乏になった話コ、ご飯を粗末にすれば、目が見えなくなったり体が悪くなったりするから、粗末にしないこと。大

晦日の麦飯の話コでした。トッチパレ

大晦日の出来事

金持ちが一晩で貧乏になった話

(西目屋村大字田代字稲元一四一 折戸谷 勉)



津軽鉄道沿線案内



芦野公園ノ圖

津軽鉄道沿線案内

【概要】

本鉄道は五所川原線五所川原駅から分岐し金木町を経て中里村に至る二十、七キロで津軽半島北部に於ける唯一の交通機関である。

【線の風光】

本鉄道は西南に津軽富士の秀峰を遠望し、東に梵珠連山を仰ぎつつ北に走っている。その風光は四季を通じて得も言われぬ趣がある。殊に芦野公園の勝景は旅客の目を楽しましむるに充分であろう。

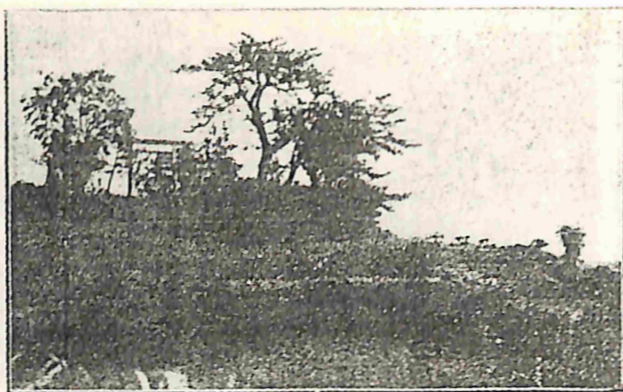
【名勝遊覧地】

名勝及遊覧地の主なるものは別項記載の通りであるが、中にもスキー場としては二ツ森、長者森、流山等あり、遊覧地として芦野公園あり、県下の絶勝権現崎あり、川倉地藏尊、高山稻荷神社、富野の猿賀神社等があって本鉄道の開通に依り老幼を問わず楽々として行楽する事が出来る様になった。

【青森県特産ひば林】

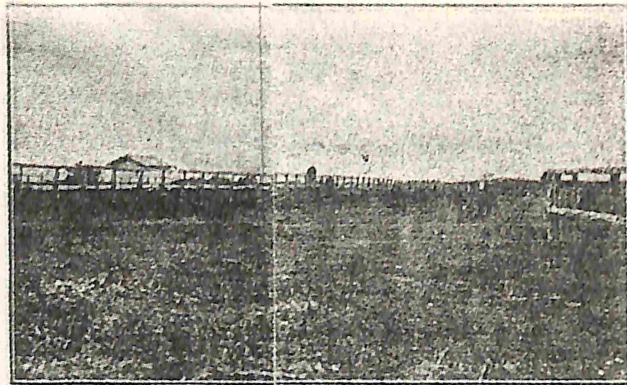
就中津軽半島本鉄道津軽飯詰以北東部沿線一帯は至る所「ひば」の美林を見ることが出来ます。その樹齢多くは百年以上二百年に達し直幹轟々として族生し一度足を林内に入れば、昼尚暗く雄壯の気自ら身边に迫るを覚えます。

高館城跡

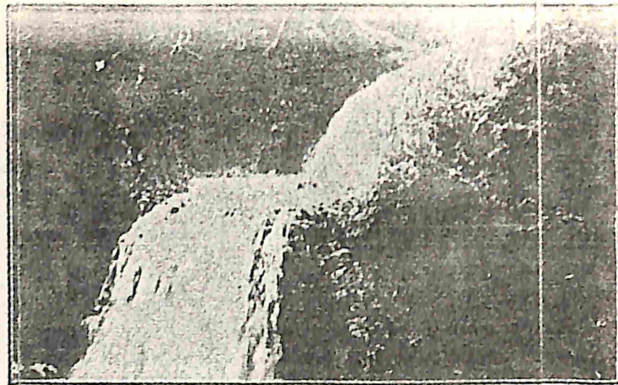


二ツ森のスキ場

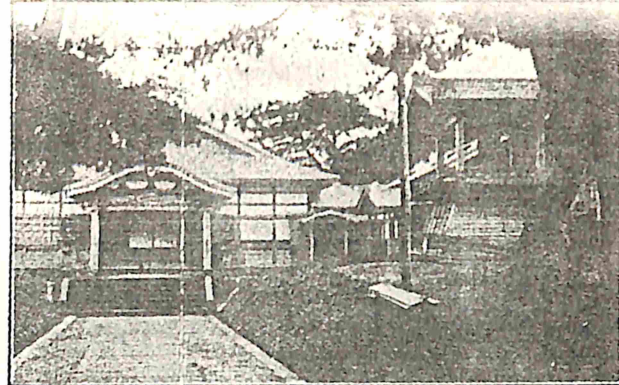




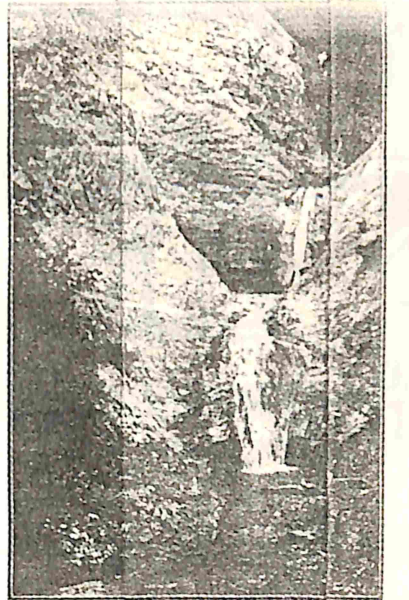
近付點勝決場馬競木金



瀧の藤



鐘梵の寺圓長



▶ 不動ノ瀧

五所川原駅 (省五所川原線)

【五所川原町】

本鉄道の乗換駅、本社の所在地である。西北両郡に於ける政治経済の中心を為し、大正七年川部、五所川原間鉄道開通後引き続き岩木川改修工事起工せられて町勢遽に膨張し五所川原線の延長、上水道の完成、津軽鉄道の開通等に依り今や商工業に於いては青森、弘前に次ぐ県内枢要の地として知らるるに至った。

津軽飯詰駅

【飯詰村】

東に梵珠山を負い戸数約四百、古城趾を始め神社佛閣等由緒古きものがあり、往古の繁栄を偲ばせるが果して同村は藩政時代に於いて津軽しんでの政治的要地であったのである。五所川原上水道の水源は此の村の東部に当たっている。

【高館城趾】

飯詰村の南端にあり頂上には招魂堂を建立し、眺望優雅にして幾多の伝説を偲ばしむるものがある。

【二ツ森】

高館古城趾の南に並び頂上より見渡せば五所川原町を始め津軽平野が一眸の裡

に収められピクニックの好適地である。冬季はスキー練習所として初歩の人々には最適の地である。又舊三月二十五日には盛大な競馬が催され地方の一名物として数えられている。

【長者森スキー場】

二ツ森の南方約二十町、未だ江湖に普く知られては居ないがその地形及び降雪が自然に一大スキー場として恵まれているので至る所に变化に富んだ優秀なスロープを持っている。

【不動の瀧】

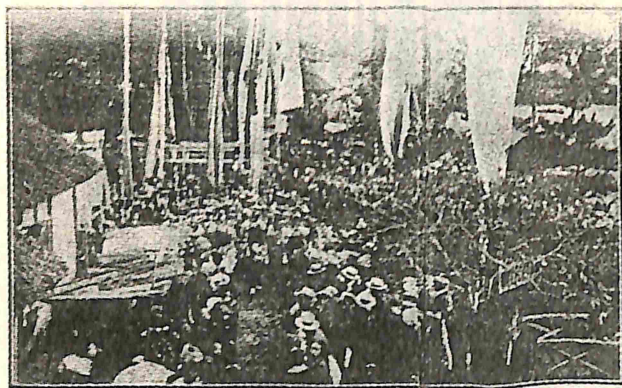
駅より東へ約一里、瀧は三段に分かれ高さ十数間奇趣に富んだ樹木があたりを覆っている。藤花のには紫の房が瀧の姿を埋め幽玄な風趣が人を魅了する。瀧の上には不動堂があつて休憩に使っている。

【長円寺梵鐘】

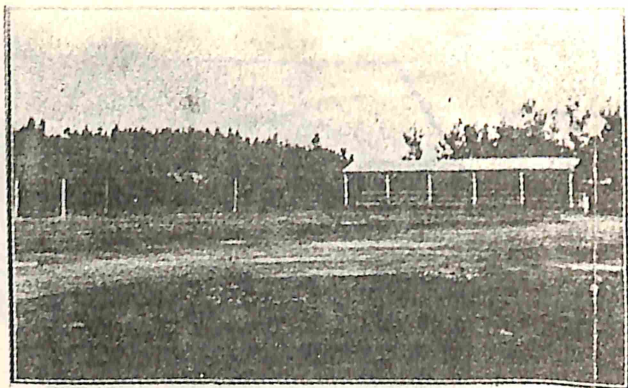
長円寺は弘前長勝寺の分寺にして寛文七年僧聖巖の開山にかかり、今を去る百年程前に火災に罹り本堂を全焼今に残るは假造りのままのものであるが、その規模大にして開山堂の立派なること付近には珍しい。右側の鐘楼高く見るは即ち名鐘「生き鐘」である。この兄弟鐘とも言われる一つは十三湖底に秘められているとのことであるが、今に揚げられていない。

【尼池】

駅より東へ約一里、池の周囲は老樹鬱蒼として昼も薄暗く池に湛えて居る紺碧



村田武郡北（社神賀猿）



ドンウラグ内園公野芦

金木町

【金木町】

本鉄道の主要駅所在地で五所川原以北に於ける文物の中心地である。戸数約九百大正九年町制施行以来急速に発展し警察署、郵便局、銀行、公園、劇場、競馬場、各種会社等諸般の施設が皆備している。尚同町は近養鶏業が盛んで県下能力検定会は此の地に開かれ津島文治経営の種鶏場は内容の完備せる点に於いて東北に冠たるものである。殊に同町の北端に当たる芦野公園は自然の風光美を以て県下にその名を知られている。

【金木競馬場】

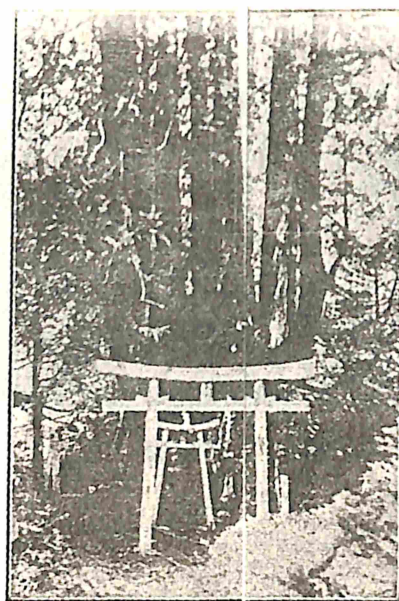
金木町の東方駅より凡そ五丁広漠たる芦野ヶ原の一部拾万余坪の地域を有し、一周千六百米のコース六百米の輓馬コース、大厩舎、観覧席、投票所等設備の良好なること全国公認競馬場中に比を見ざるところで、地方競馬規則による青森県指定競馬場三ヶ所の一に数えられ出場匹は秋田、岩手より遠征し観覧者実に万を算し勝馬の投票速歩競馬の盛大と番外に行う輓馬競争は本競馬の特色である。

【神木】

駅より東方三十町、弥七郎沢と言う処にある大ヒバで、地上七尺の箇所より十二股に分かれ周囲二丈五尺高十四間樹齢約五百年と称せられている。尚此処の池に棲息している青蛙は池上樹枝に卵を生む特性をもって居るので学会に珍重せられている。



鳴海康之助頌徳碑（金木競馬場内）



安次郎澤の神木

嘉瀬駅

【嘉瀬村】

小泊道の要路に当たり嘉瀬、長富、毘沙門、中柏木の四大字に分れ戸数約八百東部は殆ど山林原野であるが西北南部は土地肥沃で米の産額のみでも年々一万五千石を下らない。

【スキー場】

嘉瀬村東端の小高い山で駅から約二町余嘉瀬全村及金木町を俯瞰し眺望が頗る宜しい。初歩の練習には好適のスロープを持っている。

【喜良市村と藤の瀧】

喜良市村は嘉瀬駅の北東約三十町の地点あり「ひば」の産地として知られ戸数やく三百五十、営林署の所在地である。藤の瀧は喜良市の東方約一余上下二瀑に分かれ高さ各七八間巾四間あり兩岸は二十数丈の断崖を為しているので瀧の飛沫と聞答神秘的な趣を添えている。途中湯の沢の霊泉があつて諸種の病に特効を持っているので夏季は二棟の湯殿に浴客が絶えない。



芦野公園停留場

【芦野公園】

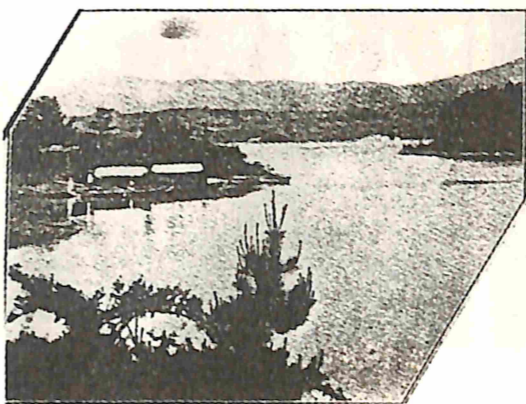
周囲数里の藤枝溜池に臨み津軽十景の中に数えられ広大な地域を擁して居るので、園内にはグラウンドあり、丘陵あり、森林あり、原野あり、池あり、岬あり、天然の風景に富める点は県下にその類を見ない良園であるが、金木町に於いては数年前より芦野保勝会を組織し年々数千円を投じて種々なる施設を為し遊覧者の便を図っている。池には貸しボートを浮かべ低廉なる料金を以て希望に応じて居るから、春から秋にかけての舟遊びや釣魚も宜し亦秋季は老松の樹下に初茸狩の清遊を試みる事も出来る。

【川倉地藏尊】

俗に賽の川原と称し、停留場より約十町池を隔てて公園と相對している。頂上には老松亭々として聳え風光明媚な事は申す迄もないが、舊六月二十三、四日の例祭には近郊近在は勿論、遠く岩手、秋田、北海道方面より集まる。老若男女を以て山を埋むるばかりである。

【高山稲荷神社】

西郡車力村牛瀉の西、金木駅より約三里、有名な七里長浜の白砂青松を俯瞰する処。舊三月十日及び八月十二日両度の祭礼には各地よりの参拝者で股盛を極め自動車馬車の便がある



芦野公園遊覧船（金木町）

高山稲荷神社（西郡車力村）

大沢内駅

【猿賀神社】

武田村大字富野にあり、駅より約十五町例年舊八月十四、五の祭日には大幟を押し立て、笛太鼓で「サンケサンゲ」を唱えながら津軽各地から無数の参拝者が集まる。当神社には、種々な伝説もあるが南郡の猿賀神社に対し「北の猿賀」と称して地方民崇敬の的となっている。

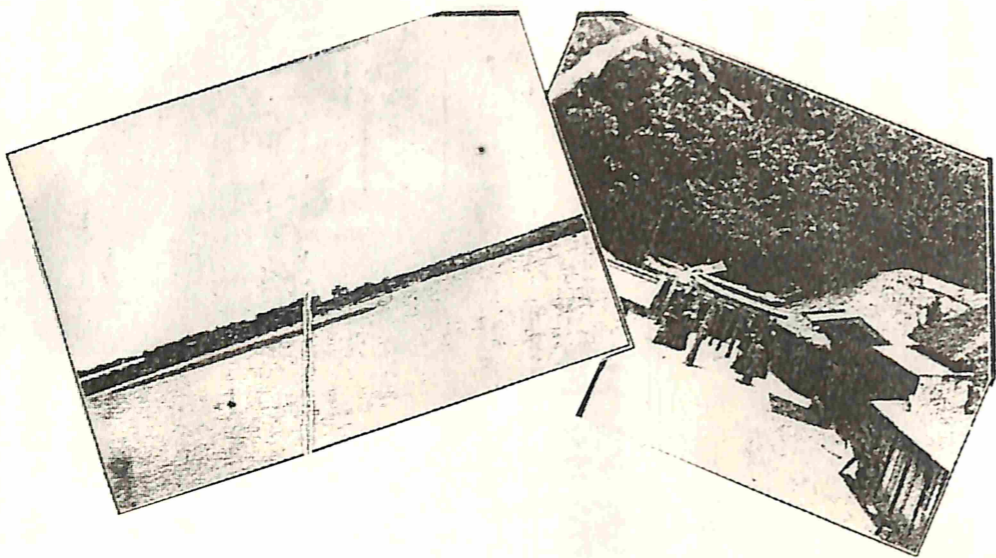
津軽中里駅

【中里村】

本村は本鉄道の終点で梵珠連山の内袴腰嶽の麓にある。中里、宮川、宮野沢、深郷田、八幡、大沢内の六大字に分かれ、戸数約六百五十、営林署の所在地である。これより北方内瀉、相内、脇元、小泊四ヶ村の門戸となっているが、内瀉及び相内は往古の遺跡に富み小泊は権現崎の絶景を以て普く江湖に知られている。

【五輪の塔】

大字中里の一小部落五輪に五個塔石がある。数百年来風雨にさらされ碑銘が消磨しているその由来を確かむる事は出来ないが伝説に依れば源義経が本県東郡三厩より北海道に渡航する際郎党大導師寺力に後争を託したが、力は此の地にきて翻心し此処に城塞を築いたが何時か幕府の探知する処となって遂に戦没したと



青森県一のコンクリート橋 乾橋（五所川原町）